

AITではDACを初めとしてオーディオアナログ信号処理用機器は殆ど開発しております。
十分お客様に伝わっていない機種等も有りますので以下に一覧をお知らせします。
キット価格はAIT組立価格から¥20,000減額し、キット価格表示が無い場合原則AIT組立のみとなります。
価格は全て税込み表示ですがオプションによって変わります。
AIT PHONO EQを除く全ての機器の性能はTHD<<-100dB、S/N(A)>>110dBとなります。
電源は全てL/R独立構成、信号処理はLp/Ln/Rp/Rnの4回路使用したFULL balance回路構成
CHdividerを除いて全て試聴機を用意しています。
往復の送料を負担(送付時着払い、返送時元払い)して頂ければ1週間程度貸し出します。

1) ES9038PRO 使用DAC (ES9018S/ES9018K2M使用機は製作中止となります)

更新状況 A) GND配線変更による音質改善
B) DSD1024対応とそれに伴う電源改良更新(殆どの購入者様が実施しています)
新規標準キット価格は¥300,000～
DAC基板差し替え価格は¥210,000～

2) AIT プリアンプ

更新状況 A) GND配線変更による音質改善
B) 機器内のclockを全て停止することによりさらなる音質向上
新規標準キット価格は¥210,000～

3) AIT STEREO パワーアンプ

更新状況 A) GND配線変更による音質改善
B) remote付きregurator搭載
C) スピーカー端子remote sensing搭載
新規標準キット価格(A,Bを搭載)は¥240,000～

4) AIT MONO パワーアンプ

更新状況 A) GND配線変更による音質改善
B) スピーカー端子remote sensing搭載
新規標準価格は(A,を搭載)は¥390,000/2台～

5) AIT DAC/プリ/パワー一体型

更新状況 A) GND配線変更による音質改善
B) スピーカー端子remote sensing搭載
新規標準価格は(A,を搭載)は¥300,000～

6) DC直結PHONO EQ

新規標準価格は¥200,000～

7) 3+1way analog CH divider

新規標準価格は¥200,000～

1) ES9038PRO 使用DAC

特徴は

- a) FPGAを用いた独自のジッター抑圧方法によりS/DPIFであっても音源に依存するジッターを大きく抑圧するので、音質劣化がない。12S入力でも同様な効果がある。
DAC内master clock周波数は45.1584M/49.152Mとなりジッターを大きく抑圧したclockとしてDACチップに供給
- b) PCM⇒DSDrealtime変換はDSD128/256/512/1024迄可能
PCM入力に限らずDSD入力でも有っても変換する。
- c) FULLscale矩形波入力でも歪みが発生しない。(head roomの十分な確保)
他社機種はオーバーシュート/アンダーシュートがクリップされ大きな歪みが発生するため記録レベルが高い(overload値の設定が小さい)音源で音質劣化がある。
- d) DUAL MONO FULL balance、DC直結構成
- e) 入力は同軸×2、光×2、USB、HDMI迄拡張可能
HDMI信号配列は所謂PSaudio配線とAIT配線を切り換えられる。
USB/HDMI入力時のDSD L/Rは切り替えられ、PCM入力に影響は無い。
PCM/DSDとfsは電気特性を測定した自動判別表示なので操作が容易

fsはPCM44.1k~384kHz,DSD2.8M~24.576MHz
但しS/PDIF入力時はPCM44.1k~192kHz迄
- f) isolateGND採用によって雑音を排除
L/R/電源のGND端子間を絶縁
- g) リモコン対応
送信ユニットは市販のTV用12キー付きを使用、東芝とパイオニアコードを選択可能
AITブリと同じ送信ユニットを使用可能
- h) 電流駆動可能
AITブリのLowZ入力に接続すれば専用ケーブル不要

頒布状況

今までES9018S,AK4399,ES9018K2M,ES9038PRO をDACチップとして採用し頒布してきましたが
今後、前3種は製作中止としこれからはES9038PRO使用DACが中心になります。
ES9018K2M使用DACは無くなりますがDAC/ブリ/パワー一体型として継続する予定です。

旧機種からの更新

ES9018S/ES9015K2M購入者様のDAC基板のみをES9038PRO使用基板に差し替える事ができます。
詳しくは別紙に記載しています。
旧機種と同じ入出力、機能なら¥210,000~となります。

2) AIT プリアンプ

特徴は

- a) 定抵抗(300Ω)アッテネーターによる音量可変方式なのでギャングエラー、音痩せ等の音質劣化が無い
0.87dB/stepの64段階に調整可能、LRbalanceも設定可能
- b) FULL balance構成で入力4CH、出力3CH(balance時は2CH)
入力は4×balance又は2×balance2×unbalanceを選択可能
出力は2×balance又は1×balance、2×unbalanceを選択可能
但し入力が4×balance時、出力は2×balance
- c) 標準仕様として電流駆動搭載
- d) リモコン対応
送信ユニットは市販のTV用12キー付きを使用、東芝、パイオニア、三洋、シャープのコードを選択可能
殆どの機能を設定可能
- e) 簡易PHONO EQ搭載可能
簡易PHONO EQではあるが、他社の高級PNONO EQより高音質回路を使用
unbalance入力でDCサーボ使用
入力抵抗は可変可能、MM可能

3) AIT STEREO パワーアンプ

特徴は

- a) 音量に応じた可変biasによるclassA動作なので小音量時は発熱を低減できる。
最良の状態にbiasを設定可能
- b) FULL balance構成で完全classA BTL動作、最大出力は15W(regurator搭載時)
- c) 電源、GNDを完全に分離したdualMONO回路構成
- d) 電源にremote sensing付きreguratorを搭載可能
- e) スピーカー端子にremote sensing搭載可能
スピーカーケーブルの影響を大幅に低減できる配線に変更可能。

4) AIT MONO パワーアンプ

特徴は

- a) 音量に応じた可変biasによるclassA動作なので小音量時は発熱を低減できる。
最良の状態にbiasを設定可能
- b) FULL balance構成で完全classA BTL動作、最大出力は80W(試験状態設定)
- c) スピーカー端子にremote sensing搭載可能
スピーカーケーブルの影響を大幅に低減できる配線に変更可能。

5) AIT DAC/プリ/パワー一体型

特徴は

- a) DACout、EXTinを装備(全てbalance)
DACoutを使用すれば汎用DACとして使用可能
EXTinに入力すればプリメインアンプとしても使用できる、unbalance時は変換コネクタを使用
- b) FPGAを用いた独自のジッター抑圧方法によりS/DPIFであっても音源に依存するジッターを大きく抑圧するので、音質劣化がない。I2S入力でも同様な効果がある。
DAC内master clock周波数は45.1584M/49.152Mとなりジッターを大きく抑圧したclockとしてDACチップに供給
- c) PCM=>DSDrealtime変換はDSD128/256/512/1024迄可能
PCM入力に限らずDSD入力でも有っても変換する。
- d) FULLscale矩形波入力でも歪みが発生しない。(head roomの十分な確保)
他社機種はオーバーシュート/アンダーシュートがクリップされ大きな歪みが発生するため記録レベルが高い(overload値の設定が小さい)音源で音質劣化がある。
- e) DUAL MONO FULL balance、DC直構成
- f) 入力は同軸×2、光×2、USB、HDMI迄拡張可能
HDMI信号配列は所謂Psaudio配線とAIT配線を切り換えられる。
USB/HDMI入力時のDSD L/Rは切り替えられ、PCM入りに影響は無い。
PCM/DSDとfsは電気特性を測定した自動判別表示なので操作が容易

fsはPCM44.1k~384kHz,DSD2.8M~24.576MHz
但しS/PDIF入力時はPCM44.1k~192kHz迄
- g) isolateGND採用によって雑音を排除
L/R/電源のGND端子間を絶縁
- h) 音量調節は乗算型DACを用いているのでギャングエラー、音痩せ等の音質劣化が無い
他社のAAVAとほぼ同様方式であるが、AITはFULLbalance構成(4回路使用)としている。
- i) リモコン対応
送信ユニットは市販のTV用12キー付きを使用、東芝、パイオニア、三洋のコードを選択可能
DAC機能を含め殆どの機能を設定可能
- i) パワー部はAIT STEREO パワーアンプと同様
電源にremote sensing付きreguratorは標準搭載
スピーカー端子にremote sensing搭載可能

6) DC直結PHONO EQ

特徴は

- a) カートリッジから信号出力迄完全にDC直結(DCサーボは使用していない)
FPGAを用いDC OFFSET発生時は出力を遮断し、瞬時にDCOFFSETを再調整する。
入電後10分程度でDCOFFSETは安定する。
FPGAの動作はOFFSET調整時のみで、終了すればFPGAのclockは停止する。
- b) バッテリー(鉛)動作で充電回路搭載し、充電中でも使用可能
満充電で約10時間動作し、残量が少なくなると警告し、動作不能時はミュートする。
- c) MC時の終端抵抗は3~4段階に設定できる。
回路の入力抵抗で設定なので、終端による損失が無く実効S/Nが数dB向上する。
測定S/Nが78dB(A)程度で実効S/Nは80dB以上になる。
- d) ヘッドアンプにLNA(LowNoiseAMP)と言うSUB基板方式を採用し、枚数を増加するとS/Nが向上し
さらに音質も改善できる。
LNAには高性能OPAが4枚搭載してあり、最大4枚/CH装着できるので、合計OPAは32個となる。
オプションでLNAは追加可能(¥15,000/枚)
- e) balance接続MC専用であるが、変換コネクタを使用すればunbalance接続も可能
balance接続すればハムの影響は殆ど無くなる。
オプションでMMも接続可能で、出力は常にbalanceとなる。

7) 3+1way analog CH divider

特徴は

- a) 全フィルターがFULLbalance構成
- b) フィルターは3次構成18dB/oct
- c) 3wayが基本であるが2wayも可能、追加してsubwoofer用出力有り。
3way時crossover中心周波数は340Hz/3.4kHz、2way時は800Hzとなる
可変範囲は中心周波数の1/2~2倍程度に16段階に設定可能
SWで設定なので再現性があり、調整が容易
- d) 各CH出力レベルもSWによる設定なので再現性がある。